死にたがりの英雄

安和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死にたがりの英雄

【Ｎコード】
Ｎ４５３０Ｘ

【作者名】
安和

【あらすじ】
私の人生（価値観？）は一人の友人によって変わりました。
その子は私と同じクラスで、（私から見て）少し変わった子でした。彼女の趣味は『小説を書く事』と『友達をからかって遊ぶ事』。
性格は『ドＳ』で『サイテー』で『鬼畜』。
そして――――『異世界人』。彼女はその世界の『英雄』でした―

――――――

この作品は「一人の世界で」の途中でリンクします。多分。（でも、リンクされるのは当分後。）

ネタバレはありません。（作者的には）

なんか展開が想像出来て嫌だという方は、見ないで下さい。

これだけでも、お楽しみいただけます。（なぜなら「一人の世界で」に主人公の友人が出てきていないから）

警告は、今後そうなる予定だから（ただの予定）

プロローグ（前書き）

この作品は一人の世界でのその後の話です。

ネタバレはありません。（作者的には）

なんか展開が想像出来て嫌だという方は、見ないで下さい。

プロローグ

始まりは同じ高校で、同じクラスだった事。共通の友達が居た事だった。

共通の友達が居たと言っても、私たちは知らないもの同士。

クラスでお花見に行くまで、そこで話しかけてくれるまで、話をすることもなかった。

同じクラスに知り合いは居ても、仲のいい子は独りもいない私と後ろの席の子と仲良く話す彼女。

後で聞くまで、その子と同じ中学出身だと思ってた。入学式から話していたから

一人でご飯を食べる私と

友達に囲まれて食べている彼女

独りは嫌だけど、大勢で居るのも嫌いな私

気がついたら、彼女は最初の友達から離れ、私と行動を共にするようになっていた。

喧嘩したわけでも、仲が悪くなったわけでもないのだけれど。

いつも変な事をして、変な事を言って、私をからかって遊んでい

る彼女

私は表情は豊かじゃない。（むしろ無表情だ）

そして口数も多くない。

いつも話すのは彼女のほうで

いつも笑うのは彼女のほうで

つまらなくないのかな？　と思わなくなったこともない。

だけど彼女は笑うから、私も楽しかった。

パッと見は真面目そうなのに、変な事を言ったり

しっかりしてそうなのに、どこか抜けてたり。宿題やってこなかったり

人見知りじゃなさそうなのに、人見知りだと言ったり。

真顔で冗談言ったり。冗談っぽくホントのことを言ったり

兄弟の話をして、自分の事を語らない彼女。（私もあまり話さないけど）

たまに遠い目をして、空を見ていたり。

いつもニコニコと笑って居る彼女

こんな事が起きるまで、知ることはなかった。

でも、私は知れてよかった。

貴女を支えることが出来るから

独りで抱え込まないで、悲しまないで

貴女が何であろうと、私は

私は貴女の友達だから

プロローグ（後書き）

ノリと勢いで始めました。連載。これ以上増やしてどうする、安和よ。

のろのろペースになる予定。ネタバレもない予定。

どうぞよろしく。

私と彼女の学校生活

「おはよう！！　小百合（さゆり）」

朝の１０分の朝学習と言う名のテストの勉強をしていた私に、彼女は声を掛けた。

彼女の名前は安田（やすだ）　朔（さく）。私のこのクラスで一番仲のいい友達。行動をともにしている友達。

出席番号４０番の私は入り口に近い。３７番の朔も、私に近い。進学校でもあるこの学校に入学し、その上、特進クラスに入ってしまった私は、少し息苦しい時がある。

朝のテストとか、定期考査とか。とかとか。主に平均点の方向で。どの教科も平均点１番とか何の嫌がらせだ。泣けてくる。それは彼女も同じらしい。お昼の時に愚痴を言っていた。

「おはよ」

そっけないように聞こえるけど、別に冷たいわけじゃない。それを知っている彼女も何も言わない。勉強しているノートを覗いてくる。それを見た私は、わざとノートを隠した。朔は覗こうとする。私は隠す。覗く。隠すを繰り返していると

「見せろよっ！！」

と、朔が頭を叩いた。痛い。「時間無いんだから」とさらに彼女は

急かした。

本日の朝学習は古典の助動詞の活用である。

めんどくさい授業をボーっと視ながら過ごし、お昼の時間がやってきた。私はお弁当を持って彼女の方へ入った。

彼女は椅子に座って跳ねている。机に上には弁当が準備万端だ。さしずめご飯を目の前にマテをされたペットのようだ。

私が到着して、椅子に座ると彼女は早速弁当を広げ、食べ始めた。待っていてくれるのは、席に着くまでらしい。

「朝のテストできた？」

そう聞いてみると、朔は笑顔で首を振る。

「無理に決まってるじゃん」

実に良い笑顔である。「勉強してないしー」と彼女は笑ってご飯をほおばっている。

「小百合くんはーーー？」

その問いに、私は即答する。

「出来るわけないじゃん」

朝しかやってないし。それだけで出来たら私はテストに苦労しない。

「さすが小百合くんっ。私の期待を裏切らないヤツだねぇ～～」

朔はニコニコしながら楽しそうだ。あと、そんな期待はいらん。

さっさとご飯を食べ終わった朔は、英単語帳をかばんから取り出した。6間目にある英？で単語テストがあるのだ。パラパラと見ていた朔は、早急に諦めて本を閉じた。

おい。勉強しろよ……

それを見た、朔の友達は

「おい、ちょんっ！！　ちゃんと勉強したのか～～？！」

ニヤニヤ笑いながら、そう朔に言った。その言い方は嫌味ではなく、単に面白がっている口調だ。どうして朔が『ちょん』とよばれる様になったのかは不明。本人に聞けば、呆れたような、諦めたような顔をして「聞いてくれるな」と言ったので、聞いてない。嫌がることは基本しない（私は）。

「うるさい、やえ。私に英語は無理なんだ！！　まったくゴマくせに！！　早く水族館帰れっ」

やえ、ゴマと呼ばれた朔の友達で、私のクラスメイトは山崎（やまざき）　恵（え）眞（ま）と言う。名字と名前の先端を取って『やえ』と呼ばれるようになったとか。『ゴマ』は顔がゴマアザラシのようでかわいいからだとか（これ、褒めてない？　微妙に褒めてるよね？）。愛されたドジっ子らしい。

朔曰く、入学式のその日に2回こけそうになったとか（朔の前で）。

言うな～！！　と言うやえちゃんの前で、笑いながら私に暴露したのはもちろん朔である。本当に楽しそうだった。
面白かった～というあたり遊んでいたんだろう。やえちゃんで。可哀想に。

「ねぇ、小百合っ。更新したんだ、昨日！！　見てみて～」

そういって彼女が差し出したのは携帯。彼女は趣味で携帯小説を書いているのだ。

彼女の書く携帯小説は、映画やドラマになるような甘いものではない。と言うよりか甘くない。むしろ酷い。主人公がかわいそ過ぎる。今までに、小説について相談（というか宣言）されたこと

1. 主人公の父が死にます。
2. ヒロイン殺しちゃうから☆
3. 実は主人公は実験体（モルモット）だった
4. そのうち主人公病むから☆
5. 主人公の過去が悲惨
6. ハッピーエンドとバットエンド、どっちがいい？
7. やっぱりヒロインは主人公の前で殺されたほうがいい？　そっちのほうが切ないよね？
8. 妹が殺人犯とか？　家族に裏切られるとか。
9. 親友が実は敵……とか？
10. そして、主人公狂うとか～☆

とか、危ない発言を私の前で（しかも学校）言った最後に、

「幸せにして、不幸にする。　上げて落とすって結構クるよねぇ～」

とさらに危険な発言をした。それを聞いた直後に

「サイテーやっ」

「鬼畜っ」

「幸せにしてあげてっ」

「やめたげてよぉ～」

「ドS」

と、いってしまったのは無理もないと思う。

それでも彼女はニコニコしている。本当に楽しそうだった。

「そんな事言って～。かおなしの写真、見せるよ？」

私の嫌なところをついてきた。私はかおなしが、大の苦手なのである。そのせいで、私はあの映画を見れなかった……。

それを文化祭で作ったクラスがあり、朔に苦手な事がバレてしまったのだ。彼女はそのクラスの友達から写真をもらい、明日の予定を聞いた私にそれを送りつけてきた。

それを見た瞬間小さな悲鳴が出てしまったのは仕方のないことだと思う。塾だったので、友達に心配された。　悲鳴が出たと朔に文句を言えば、彼女は笑ってその瞬間を見たかったとまで言い出した。……コイツドSだ。

そう朔にいえば

「私はSじゃなくてノーマル。さゆたんがドMなだけだよ☆」
とニコニコ……じゃない、ニヤニヤと言って来る。それにイラついて「違うわっ！！」と言えば
「ゴメン。さゆたんはただのドMじゃなくて、【SになりたいM】だったね……いっ！」
それを言われた瞬間、朔の頭を叩いた。この台詞は、私の友達から言われているのを朔に聞かれてから、事あるごとに言われている。
叩かれた朔は少し痛そうにしながらも、
「もぉー、叩くんだったら頭じゃないところにしてよ。これ以上バカになったらどうすんの」
叩かれて当然のことをしたと朔も分かっているから、叩いたことに文句は言わなかったが、場所に文句があったらしい。
バカになるとか……数？で１００点とったヤツが何を言う。自慢か！！　ふざけんなっ！
私に点数をよこせっ！
「ゴメン」
条件反射で謝るが、果たしてこれは私が悪いのであろうか？
「いいよ。さゆたん☆」
「さゆたん言うな！！」

中学時代の友達に付けられたニックネーム。私が嫌だと言うほど朔は連呼してくる。そして私をみて笑う。悪循環過ぎる。最近はもう諦めた。諦めても、朔は癖になったようにずっと言っているが。

こんな日々を、ただただ続けていた。

この繰り返しの日々が、ずっと繰り返されると思っていた。

私と彼女の学校生活（後書き）

ここに出てきた会話は、作者とリアルさゆたん☆との間でなされた会話です。

はたから見たら面白そうなので、使ってしまった。

ニックネームは基本ホントに使われてたもの。

始まりの学年集会

英語の時間が終わって、ぐったりしている朔のところに行った。

「7間は学年集会だから移動だよ」

「そんなのいつ言った……」

「さっき」

「……」

そう言うと、朔はゆっくりと立ち上がった。朔はこのクラスの女子の中では一番大きい。身長１６６ｃｍ。体重は××？。ＢＭＩが１７．５とか言うふざけたガリガリくんだ。もっと肉付けろ。私なんて××？だからな！！　お前にやればちょうどいいんだ！！

「何か言った？」

「別に？」

何かを感じたらしい朔はこっちを向いて、何かを聞いてきた。それを何事もなかったかのように返す。こういう時に無表情って便利〜〜。

「小百合くん」

「ん？　何？」

「別に？」

「おいっ！！」

朔はニヤニヤしながら、こちらを向いていた。仕返しらしい。考えている事を聞かないのはいいが、こういうのはやめて欲しい。

朔はフッと息で笑った。確実に面白がってやがる……コイツ。

「ホント小百合くんって面白いよね～？」

そんな事言うのは限られた人だけですよ。

「無表情で、ぷぎゃーとか言ったりさぁ、それだけでも笑える」

失礼ですよね？　キミ。

「メールで【ｍ９（＾ｑ＾）ぷぎゃー】って送ってくるけど、それを無表情で送っていると思うとさらに笑える」

黙れや。周りの視線は感じないからいいけど。みんな自分の事でいっぱいだし。

「ってことを、１階の階段横で私の中の一番のアレと話してた」

「おいっ！　恥ずかしいわ！！」

階段は響くところである。朔の言うアレとは共通の友人のことであり、一番の変わったヤツと言う認定を受けた（朔に）。私の周りには変わったヤツしかいない。

そもそもアレは音量を押さえるとかしないから、普通に大きな声で話していたんだろう。私の事を。

「そう？　共感してくれたよ？　そこが小百合君のいいところだよ。うん」

「ふざけんな」

そんな会話をしながら、集会をやる体育館に急いだ。

そんな集会の話題は、服装と勉強について。スカートが短いだとか、勉強時間が短いとか（なんか全部短い）。もちろん私はスカートは基準通りだ。勉強時間はゲームのほうが、長いけどな！！

そう思っている中、何故か上から紙が落ちてきた。ふと上を見上げると、2回の通路の窓から入ってきているようだ。バラバラと数え切れないほど多くの紙が、体育館の中で舞った。

無地かと思えば、こう書かれていた。

【血狂いの一家の末裔よ、
ワタシはお前の一族を許サナイ。
向坂家は必ず皆殺しにする。
交渉をシヨウカ？
『血狂い』を差し出すか、皆で仲良く死ぬか
D組だけこの場に残れ
他の者は出て行け
従えば、キミタチはまだ死なない】

なに？　コレ……

沢山の紙を不審がる人、先生は周りを見渡していた。現実感がないこの紙に、皆、どうしていいかわからなかった。しかもＤ組。これは私のクラスだった。

「キャァァァァァァァァッ」

悲鳴に気がついてそちらを見れば、一人の女生徒の頭に拳銃を突きつけている敵が視界ににはいった。

服装は真っ黒。体格から男のような気もするが、顔をしっかり隠しているため、はっきりとは分からなかった。

「Ｄ組以外は速く出ろ。反抗しようと思うなよ？」

現実味のない出来事。平和な日常に訪れた、危険な非日常。それはテレビや小説の中だけの話で、現実に、自分の目の前で起こるなんて考えられなかった。

テレビの報道も、たとえ近くであっても、所詮は他人事（ひとごと）だったのだから。

Ｄ組の周りには見知らぬ人が沢山居て、出て行かないようにしていた。

一人の女の子が、立ち上がった。

「どうして、Ｄ組だけっ……なんですか」

叫んだ時に拳銃を向けられ、最後は、音量を落とした。

「どうして？　考えれば分かるだろ？　いるからだよ」

いる。それは、この敵の言う【血狂いの一族】の事だろうか。

だけどそんなの聞いたことがないし、そんな危ない人は居ないはずだ。

だってずっと平和に暮らしてきたんだから。

「伝言だよ。我らが当主から『迎えに来たよ、相棒。いや、私の花嫁』だとさ」

それを聴いた瞬間、朔が頭を押さえた。朔の息が荒い。朔に慌てて駆け寄った。

朔はずっと「どうして……。どうして……？」と繰り返している。

そんな朔をみた男達は、笑った。

「やっぱり居たか。安田朔。いや、【血狂い】の向坂（こうさか）家、　向坂朔？」

「なんだ、お前達は……？　当主とは、いったい……」

「ヤスって言えば分かるって言われたが？」

その言葉に朔は目を大きくさせた。そのまま呆然として、「ヤスカズ……？」と呟いた。

その呟きに呼応するように、何もない空間から一人の男が出てきた。

２０歳は超えているだろう、一人の青年が。

「正解。覚えててくれてうれしいよ、朔。さぁ、こちらにおいで。そうすれば、みんな助かる」

「靖一（ヤスカズ）……。これはお前が？」

ヤスカズと呼ばれた男は、朔と会えたことがうれしいとでも言うように、笑顔だ。反対に朔は表情を固まらせている。

「そうだよ。さぁおいで。そこは、キミの居るべきところじゃないんだ」

その言葉に、朔はうつむいた。肩を振るわせたので覗くと、笑っている。初めて見る、悲しげな笑顔で。

「居るべきところ？　結局は、私に自由はないって事か……」

ボソッと呟くと、朔は顔を上げた。

「断る。」

「じゃあ、クラスメイトがどうなってもいいの？　薄情だねぇ？」

「誰も、殺させやしない」

朔が出した気迫に、誰も、何もいえなかった。そしてそのすぐ後、周りにいた男達はいっせいに倒れた。

「クッ」とヤスカズが声を出すと、ヤスカズは消えた。朔に視線をやれば、「幻術だ」と短く返ってきた。そんな非日常で信じられな

い事がスラッと返ってきても、それを質問する暇なんてなかった。
そんな余裕もなかった。

「みんな、ここで固まってて」

そういうと、ぞろぞろと男達が入ってきたほうに向かって走り出した。
その姿は今までの朔と違って、すばやくて、どんな動きをしているのか私には見えなかった。ただ、圧倒していることだけが分かった。

銃を撃とうとするものが居れば、朔はそちらに手を向けた。それだけで、銃は使えなくなった。朔の見えない力が、相手を圧倒した。だれも、朔を止める事ができない。

「クソッォ。あんなの、ただの高校生がする目じゃねぇっ！！」

そう叫んだ男も、また、倒れていった。
それを見ていた私は、気がつかなかった。自分の背後に来た男に。

「うわぁっ」

気がつくと首元にナイフが当てられ、人質にされていた。
男は、正気とは思えない目で、こっちを見ていた。

首に当てられた冷たい金属の感触に、狂気が滲む瞳に、私の考えはフリーズした。

周りの音が遠ざかっていくのを感じ、ナイフが振り下ろされるという情報が目に移った時、突然抱きしめられた。さっきまで、離れた

ところで戦っていた朔に。
抱きしめられたと感じたとき、自分の後ろで事故が起きた時のようなバーンッと言うような音が響いた。
考えが正常に戻ったときに、朔に声を掛けようとして気がついた。
朔の腕が震えている事に。

「朔？」

「……た」

「え？」

「よかったっ！」

声が震えて泣きそうな朔に、私のさっきまでの恐怖は消えていた。

「また、失うかと思った」

「また？」

「何もできずに、また、ただ奪われてしまうのかと思った……」

私の質問には答えずに、強く私を抱きしめた。震える朔を安心させようと、私も強く抱きしめ返した。それに安心したのか、朔は私を放した。私の顔を確認すると、朔は優しく笑った。私は、そんな朔を見つめていた。
それ故に、気がつくのが遅れた。

私たちに向かって、何かが飛んでくるのに対して。相手は、気の緩んだ瞬間を見逃さなかった。

「お前は、邪魔だッ！！」

「しまったっ！」

私に向かって飛んでくる札をみた朔は、私を再び抱きしめてよけた。

……はずだった。

飛んできた札は発光し、朔を除き、私の周りにいたクラスメイトを包み込んだ。

そして、私を含んだ数名はこの世界から姿を消した。

始まりの学年集会（後書き）

な、何とか、書けた……。

森の中

強い光に包まれ、その強さに目を閉じた。
そして目を開けると、目の前にあったのは木、だった。
森の中……？
そこにいるのは自分だけではないらしく、やえちゃんこと恵眞ちゃんもいた。
飛ばされた……？　私の大好きな某マンガの某キャラの言う「ビックリ人間の万国ビックリショー」を現実（リアル）で見たので、それもありえるかもしれない。
しかし、相手はスーツだとはいえ、なんか札とか持っていたから陰陽師かと思った（一瞬だけ）。だけど、陰陽師にこんな力があるのだろうか？　いや、リアル陰陽師も知らないけど。どうせマンガの知識だけど。
「ねえ、大丈夫？　怪我無い？」
「うん、だいじょう、ぶ……え？」
心配された声に、普通に大丈夫と答えるが、それは見知った声ではなかった。聞こえたのは私と恵眞ちゃんだけらしく、他の人は急にしゃべった私を怪訝そうに見ていた。
「聞こえた？」
「うん。でも、誰？」

不気味に思って、二人で話す。それに二人しか聞こえないというのも謎だ。

「わぁっ。二人とも聞こえるんだねっ！　加護持ちなの？　異邦人なのにっ！」

また聞こえた。周りを見渡すが、飛ばされた数名のクラスメイトしかいない。さすがに私は眉根を寄せた。

……不気味すぎる。

「あぁ…。こっちだよーー。ここっ。下っ。花っ」

花？　そう思って下を見ると綺麗なハスのようなものが浮いていた。

浮いて……え？

その花はに開くと、そこから小人のような手のひらサイズの人間が出てきた。

いや、人間じゃない。耳とがってるし。アレだ、朔が読んでるファンタジー小説に出てくるエルフ的特長と酷似している（耳が）。

目はガラス玉のように輝いていて、髪と目は空色のような、薄い青色だった。

非現実的な事に、もう何もリアクションが取れない。

「ボクがはっきり見えているのか……。なるほど。キミ達が姫の言っていた人かな？」

ボソリとその妖精？もどき？が呟いた。

そうして、私たちの前まで浮かび上がった。

「はじめまして。水の精霊王【スプリット】が眷属、アクラディ。よろしくね？」

妖精？は精霊でした。

……はぁ？　いや、信じれない。うん。信じたくないんだけども、信じないとやっていけないというか、現実を受け入れないといけないというか。

だって浮いてるし、耳とがってるし、精霊王とか出てるし、眷属とか周りできかねぇよっ！！

「混乱してるねぇ……。その言葉はえっと……うんとっ、英語？日本語？　姫の惑星って事は分かるよ。研究してたし。……構ってくれなかったし」

なんか最後のだけおかしいっ！　姫の世界ってなんだ？　私たちの惑星は地球なのに……

「日本語だねっ！！　ようこそっ、我が世界へ。君たちの言うところ、ここは異世界ってやつだよ」

「「はぁっ？！　異世界ぃっ！！」」

見事にこの声は恵眞ちゃんとハモッた。いや、そうじゃなくて。

これはもしや、トリップってやつですか……？

朔がいたら叫んでそうだ。ファンタジーラブなアイツは……。うん。

想像できる。
ハッ……でも、アイツがいて私が妖精？　なんて思った事がばれれば、
「ええ～～小百合君が妖精なんて思ったの？　何時からそんなメルヘンな思考に……プッ」
と言い出しそうだ。（しかもニヤニヤ顔で）
でもそれは、“私が知っている”朔ならば、の話だ。最後の朔は、私の知らない朔だった。
目の前の精霊？　が何か言っているが私の処理能力がパンクしてしまった今では、何も聞こえない。
「膨大な魔力を感じてきてみれば、やはりそうですか……」
ガサリと草が音を立て、人の気配を感じて私は現実に戻ってそちらを見た。ピンクの髪に空色の瞳を持った女の人が、そこに立っていた。
「はじめまして、この国の腐った貴族の被害者の皆様。その者達がここに来るまでにこの場所から離れねばなりません。説明は後で。私についてきてください」
女の人はいきなりそう言うと、人数を確認し始めた。「これで全員ですか？」と近くにいたクラスメイトに訊いている。その子は驚きながらも、周りをみて「多分そうです」と答えた。
いきなり来た、しかも見知らぬ人にそう言われて、私達はすぐに

動けなかった。

「その者達に捕まれば、貴女方の身が保障できませんっ。ここから早くっ」

「面白い話をしているじゃないか？　ん？」

女の人の焦りとは裏腹に、見知らぬ男達がそこに立っていた。

私達のところで見る変質者とは比べ物にならない、下卑な顔をした男達だった。

気持ち悪い……

うっと、口を押さえた。意味のない行動と分かっていても、そうせずにはいられなかった。

「お嬢ちゃん達は、全員連れて来いと言われてんだ。まぁ、生きてりゃいいよな……？」

そう言って、男は腰につけていた剣を取り出した。そして、私達に逃げてといった女の人にその剣先を向けた。

「どうやってここを知ったのか知らないが、見られちゃ困るんで。悪いが死んでもらう。それとも、俺達の慰み者にでもなるかい？」

剣先を向けながら、男達はニヤニヤと笑い出した。

笑っているのに、今まで私達がいたところでは感じる事のなかった空気。声を出す事が出来なければ、足を動かす事もできなかった。

「下郎が……」

女の人の雰囲気が変わり、ハッと首だけ動かすと目が据わっていた。
それに男達は何かを感じたが、厄介なものだと思ったのだろう。
そして、下郎発言が効いたらしい。顔が真っ赤になっていた。

「女の分際で、ふざけんなよっ！！」

「そういう考え、一番嫌いなんだよね～」

男が激昂して、こっちに走って来ようとしたのを一つの人影が気の抜けた言葉で止めた。止めたというより、乱入者に男が驚いて動きを止めた。というのが正しい表現だろう。
その人影は足を引っ掛け相手のバランスを崩すと鳩尾にひざを入れ、首あたりに手刀で叩きあっという間に気絶させた。迷いもない、綺麗な動きだった。

「うわ、よっわ。弱いくせに見下すんだ。あぁ。弱いから見下すんだね。きっと」

その男が倒れたのを、その人影はなにも感慨を持たず見ていた。
周りの男達は、急に現れた乱入者にリーダーっぽい人をあっさり倒されたからか、動けずに驚愕のまなざしで、その人物を見ていた。

私は、その声を知っていた。いつも私をからかっていた声だ。だけど少し違う。私のときは、からかっていても、そこには優しさがあった。今の声は同じ人とは思えない、冷たい声。

「大丈夫だった？　小百合君。間に合ったかな？」

だけど、私にかけられた声は優しくて、それに安堵した私は一気に

緊張が抜け、意識を手放した。
意識を失う前に「小百合っ」と少し焦ったような朔の声を聞いた気がした。
その焦った顔に私はニヤリと心の中で笑った。

森の中（後書き）

意識を手放すなよっ！　主人公っ！！

森の中＋α

助けたはずの小百合君が光に包まれたら消えた。周りの数人のクラスメイトをまきぞいに。

「どこにやった！！」

普段の彼女を知っているクラスメイトは、その怒号に恐怖した。知っている人間が、急に知らない人間になったようだ。

「ここじゃない場所だ。先にお前を送ろうと思ったが、お前一人では帰ってこないと思ったからな。人質がいれば帰ってくるだろう？」

ニヤニヤと悪びれもなく笑う男に、朔のイライラはピークに達した。音も立てずに男に近づくと、胸倉をつかみ、足を引っ掛けて転ばせた。

「何の為にだっ」

「力が全てであると、知らしめすため。お前は宝の持ち腐れさ。あちらはすごいらしいぞ？　力が上げられて、しかもこちらに帰ってこれる。力がなければ途中で死ぬがな」

そう言った男に朔は今までのが序の口だといわせるような殺気を出した。普通の高校生が出せない、出す必要のないもの。そしてこの殺気は、戦いに身を投じた事のあるものが出せるものだ。

「どこだ」

朔は表情を消すと、声を抑えて問うた。朔の顔を正面から見る事になった男は失禁しそうになった。あまりの恐怖に歯がガチガチとなり、体が震えている。

「こ、ここではない世界……た、たたたしか、レイサラス王国とかいった……」

そう言った瞬間朔は男から手を放した。男はヒッと声を上げて尻餅をついた。本能は逃げなければと思っているが、体は動かなかった。朔の目が、そんな事を許さなかった。

朔が何かを呟いたが、その言葉は小さくて男にしか聞こえなかった。先程の冷徹な瞳から、悲しみの色を纏った朔に男は驚き、朔をじっと見つめた。朔はそんな男を見ると、笑った。恐ろしいほど、純粋に。

「情報、ありがとう」

男はその言葉を聞くと、命を落とした。朔は迷いなく、男の命を刈りとった。

周りにいる人は、朔がそんなことしたのが信じられず驚愕の瞳で、見つめていた。だが、頭を失った体から溢れる血が、真実だと伝えている。

朔はそれを無感情に見つめると、不意に虚空に視線を向けた。

「スイ」

「はい。主（マスター）」

朔が呟くと、虚空から男の人が出てきた。女顔の男で優しげな顔の

パーツを持っていたが、その人が纏う雰囲気がそれを裏切っていた。笑顔なのに、優しい口調なのに、怒っていると分かる。

「行ってくるよ。逃げたままではいられないから」

「はい」

「私がこちらに戻るまで守れ。こちら側に死人をだすな」

「御意」

朔はそう言うと、男の持っていた札をつかみ、何かを口ずさんで不意に消えた。

残された男、スイは愉快げに笑った。

「主（マスター）に喧嘩を売るなんて、馬鹿だなぁ。だが、いい機会だ。久しぶりに、暴れさせてもらおうか」

その数秒後、学校にたくさんの悲鳴響きわたった。

◇◆◇◆◇

「いッ…つぅ……。クソッ。ここどこだよ」

朔は札を使って、森の中に来ていた。気の違いから地球ではない事は分かるが、自然の気が強すぎてここがどこなのかも、近くに町が

あるのかも分からない。
注意深く周りを見ながら歩いていると、人の声を拾った。
「誘拐だけで金貨5枚ももらえるんだぜ？　おいしい仕事だよなぁ」
「あぁ。それに全員女なんだろ？　ヤっていいかな？」
「ふっ。やめとけ。お前がそんな事をすれば女の価値が下がる」
「ちげぇねぇ」
朔が聞いたのは、下品な会話をしている男達だった。
女達……。消えたクラスメイトは全員女子だったはずだ。
自分の知っている人物である事の可能性があがったため、遠くから離れて尾行する事にした。
しかし、用心に用心を重ねた結果、抜刀を許してしまい、誰かに突きつけていた。
「下郎が……」
そう言った女の人の声が聞こえた。やっと声の聞こえる位置まで近づけれたらしい。男達はいったい何を言ったのやら。
ちっぽけなプライドやらが壊れたのか知らないけど、男達は激昂した。
「女の分際で、ふざけんなよっ！！」
ほほう？　分際？　格下に向かって言う台詞だと思うけどね。

私は、そんな男尊女卑な言葉が大っ嫌いなんだよ。

「そういう考え、一番嫌いなんだよね～」

相手を油断させるために、軽い声を出した。思惑通り、男は一瞬動きを止めた。

朔はその隙を逃さず、足を引っ掛け相手のバランスを崩すと鳩尾にひざを入れ、首あたりに手刀で叩きあっという間に気絶させた。

あまりの手ごたえのなさに、がっくりする。

「うわ、よっわ。弱いくせに見下すんだ。あぁ。弱いから見下すんだね。きっと」

周りの男達は、急に現れた朔にリーダーをあっさり倒されたからか、動けずに驚愕のまなざしで、朔を見ていた。

朔はそんな視線を放置し、敵に一番近いところでうずくまっていた小百合に声をかけた。

「大丈夫だった？　小百合君。間に合ったかな？」

いつもの無表情を崩し驚いている小百合を見て、朔は笑った。

そうしたら、小百合は安心したように笑って倒れた。

驚いて小百合を呼ぶと、敵の仲間ではないらしい女の人が支えてくれた。

ホッとすると、女の人が目配せしたので頷いた。

「皆、この人についてちょっと避難してて。この人に害意は感じら

れないから安心して」

そう言うと、この状況が怖かったのか女の人についてこの場所から離れていった。

それにハッとなった残っていた男達が追いかけそうになったが、朔が殺気を発したのに驚き、動きを止めた。

そして、朔はどこともなく短剣を2本取り出すと、一本を男達に向けた。

「邪魔者はいなくなったよ？　さぁ、おいで。存分に遊んであげよう」

そう、朔はニヒルな笑顔を浮かべた。

そして、その台詞から数秒後レイサラス（こちら）でも、男達の悲鳴が響き渡った。

ただ、精霊が結界を張ったお陰で、小百合達には聞こえなかった。

森の中＋α（後書き）

二話続けて投稿。

最近「一人の世界で」が詰まってる……。一話書くのに時間がかかる……。

こちらは完全に息抜きです。

しかしご安心を。あちらの週一更新は止めません。これは不定期更新ですが。

とにかく王都に行くようです

静かな、薄暗くなるぐらい木が茂る森の中に不相応な血の海が出来上がっていた。
頭と胴が切り離されているもの、四肢の全てが切り離されたもの、かろうじて四肢は繋がっているが目を見開き、白目を向いて死んでいるもの、そして人としての原形をとどめていない沢山の屍が転がっていた。
始めに視認した人数よりはるかに多い屍。恐らく影だろう。夜に生きる者たち。その全てを返り討ちにしたとでも言うのだろうか。
この、年端も行かぬ少女が。

その全てを返り討ちにしたとみられる少女はその血の海の中心に居た。彼女の半径1メートルぐらいの円にはもともとあった草の緑の色を見ることができた。その少女はこちらを見ると

「あぁ、貴女でしたか。……みんなはどうしました？」

周りの風景とは場違いのような、温かみのある冷静な声を発した。心配ないというように合図を送ると少女は、一本の木に向かって歩き出した。そこに貼られていた紙を剥がし、また別の木についている紙を剥がす。どうやら重要な札らしい。少女は屍をないもののように扱い普通に歩く。少女が歩くたびに、耳障りな音がぐちゃぐちゃと鳴った。

「貴女は……何者なんですか？　それくらいの年の子は、その行為にそんなに慣れてないと学びました。それなのに、何故……」

手馴れているのか？　そこまで口に出す事はできなかった。この国

は近年まで戦争を行っていて最近立ち直ったばかりだ。戦争でも、こんなに非道なものはなかった。
その問いに少女は意外そうに片眉を上げた。そして笑う。そしてかっこつけるのが許されるなら、と前置きすると
「血に狂っているからですよ。本能のままに動く、獣。ただ排除するのではなく、圧倒的にそして一方的に蹂躙する。……そう、ただの人殺し」
その瞳は悲しげに見えた。そのオーラを一瞬にして拭い去ると、また少女は笑った。
「早く血を浄化して、彼女達のところへ行かなければ。“元の私”に戻らないと。心配しますよね？　きっと！」
そういってさっさと歩く少女を、ずっと小百合達を助けた女――ウーネ――は見つめていた。そして、彼女の周りには精霊がふわふわと漂っていた。

――――――――……

私が目を覚ますと、見知らぬ天井が目に入った。どこだろうと思って周りを見渡した。まだ起きている人は居ないらしく、みんな寝ていた。その寝ているメンバーをみて、私は思い返していた。
「ここ、異世界、だっけ」
声に出しても現実味はない。だけど、窓から見える景色が、知らな

い部屋やそこにある身近にない調度品がそれが現実だと言う事を主張する。夢であることを許してくれない。何度目を閉じても、自分の知った景色に戻ることはなかった。

確か、自分達は襲われたはずだ。気持ちの悪い男達に。そして助けられた。……誰に？

ただ、安心する声だった気がする。そこから覚えていない。

何も前触れもなく、ドアが開いた。

「あ、小百合くんおはよう。目、覚めた？　小百合君ってば気絶してそのまま寝ちゃうんだもん。驚いたな～」

いつもの調子でそう話す朔が入ってきた。ただ、いつもと違うと言えば、朔から足音が聞こえないという事だ。考えすぎなのかもしれないけど。

その朔の声で、周りの子はもぞもぞと動き出した。目が覚めてきたらしい。にんまりと笑ったままの朔をジト目で見た。

「……お前、ワザとだろ」

「いいえ？　そんなことありませんヨ？」

朔は楽しそうに笑ったままだった。そこに、助けてもらった女の人が入ってきた。

「皆さん、お早うございます。朝食をもらってきましたよ」

メイドさんみたいな人が後に続いて入ってきて、人数分のパンとシチューとサラダを並べ、出て行った。

困惑する私たちを置いて、朔は席に座って食べ始めた。目は早く食べろと訴えている。私たちは良く分からないまま用意された朝食を食べ始めた。……が、いかんせんパンが固い。朔や、女性の方を見れば、シチューにつけて食べている。なるほど、だから朝からシチューが出るのか。私は朝は米派だけど、贅沢は言ってられないので、二人の真似をしながらもそもそと平らげた。

「自己紹介がまだでしたので、挨拶しますね。私はウーネ。ウーネ・デアグアと申します。あなた達のような犠牲者を助けるよう、主（マスター）に言われておりましたので、お助けしました」

女の人、ウーネさんは綺麗な笑顔を浮かべそう挨拶した。私たちも順番に挨拶した。私の挨拶の時に朔が絡んできたのを除けば、いたって平和に終わった。こんなところまで『さゆたん』って広めるなよっ！！

ま、それはともかく、何故ウーネさんが場所を特定できたのかと言うと魔力反応がどうとか、らしい。（よくわかんなかった。）

魔法があるのか～、ふ～ん……ん？

魔法？　いや、剣と魔法のファンタジーいやっほっおおい！！じゃなくて！！

……どこまでファンタジーなんだ。この世界は……。

そして、ウーネさんの話によれば、私たち異邦人（異世界人）は王都にいくのが普通らしい。そこで王様にその真偽を確かめてもらい、帰れるようにいろいろと動いてくださるらしい。

何故そんなシステムがあるのかと言うと、ここ最近あった戦争が

終わってから、何故か地球のものがこちらに落ちてくるようになったらしい。ガラクタから人まで。この世界にはない知能、技術をもつ私たちにふれた貴族が、私たちを呼んだりして増えているらしい。原因は解明中だとか。

「異世界人である貴女達に迷惑をかけ続けない様に、世界各国で協定を結びました。保護する事と召喚しない事です。これを破れば生き地獄を体験すると言いわれています」

ウーネさんは深刻な顔で語ってくれた。そして、この国の王は他国よりも丁重に扱ってくれますから、と笑ってくれた。

現実かは、まだ信じきれないけど一応自分の事なので、協定を結んでくれた人とそのシステムを考えてくれた人に感謝した。……生き地獄ってなんだろ？　なにか突っ込んではいけないにおいがプンプンする。スルースキル発動！！　……私は、そこにふれない事にした。

「それを考えてくれた人は誰なんですか？」

やっぱり感謝するよね～と、クラスメイトがいったその質問に小さく頷いた。もちろんウーネさんのマスターにも感謝してます。見つけてくれてありがとうございます。もう少しで、不本意な未来が待っていたかと思うとぞっとしますから。

「我が国の、いえ。世界の英雄ですわ」

「英雄……？」

えーゆー？　携帯の？　え？　違う？　ひでお（注：ひでお＝英雄）のこと？

現実(リアル)に英雄なんて居るの？！　あ、ここはファンタジーだった。何でもありかこんちくしょぉぉぉぉ！！！！

英雄さん。八つ当たりスミマセン。感謝してます。

ウーネさんはそこで話をきると、「続きは馬車の中で話しましょう」と言った。ちょうど、全員が食べ終わったらしい。

「じゃあ、準備したらすぐ出るので。なるべく早めにしてくださいね？」

と言って、ウーネさんは部屋から出て行った。

命の恩人に逆らえるわけもなく、さっさと準備する。といっても、身なりを整えるだけ。私たちが悪目立ちしないように買ってきてくれたワンピースに着替えるだけ。

ワンピースなんて何年ぶりだろうとか考えて少しだけ現実逃避をした。何故女はスカートを履かねばならぬのだろうか？

そんな事を思っている間に、みんなは話の切られた英雄について話を膨らましている。いつもだったらギャーギャー言っているはずの朔は何故か無言。黙々と着替えていた。

外を見れば、ウーネさんが馬車を用意していた。急いだように指示を出していた。

それを見て思った事がある。

王都に急ぐ理由って何だろう？

理由

「急ぐ理由、ですか？」

急かされて馬車に乗り、馬車に慣れてきた頃に私は最初に思った疑問を質問した。私は急いであの世界に帰りたい訳じゃない。帰れるかわからなかったら不安だけど、返してくれるような事を言っているので気分は楽だ。昨日の追っ手はこっちには来なかった。それの増援を恐れて私達を急かしたのか。しかし、ウーネさんの顔に恐怖の表情は浮かんでなかった。

「すみません、話しておりませんでしたね。この世界には、襲ってきたああいう輩や、それを雇ったもの以外に貴女方異世界人を狙うものは居るのです」

「え？」

「異世界人を保護し、王城までつれてきたのには少ないですが謝礼金がでます。それを狙うものが居るのです。また、貴族に差し出すものもいます」

わぁ、危険がいっぱい。

……え？　あんな気持ち悪いのが大量発生？！　無理！！　わたしこの世界から早く出たい！！

ううううう。でも、貴族の人って、私達を召喚したって言ってたよね？　何で呼んだわけ？　私達を捕まえて何する気なの？

顔に出ていたのか、ウーネさんが答えてくれた。

「……異世界人は何か特別な力を持つといわれています。この国、いえこの世界にはない力を。それを利用しようとしているのです」

不思議な力……私は分からないけど、皆は分かったのかと思い、見るけど誰もわからないようだった。自分の手や体を見て不思議な顔をしていた。ウーネさんはそれを見て困った顔で笑った。

「まだ、力が開花していないんですよ。何が切欠（きっかけ）で開花するのか分かりませんから」

「それで、私達を捉えようと……」

誰かがそう声を漏らしたとき、目を瞑っていた朔が「それだけじゃないな」と口を開いたウーネさんが驚きで目を見開かせ、朔をみて何か言おうと口を開いた。ウーネさんが何か言う前に、朔が言った。

「奴隷にするためじゃないのか？」

「サクさっ――――」

朔の言った言葉に賊を相手にしても顔色を変えることのなかったウーネさんが焦った顔で朔の名を呼んだが、朔がそちらをちらりと見ただけで、ウーネさんは黙った。朔は、体育館で見たような鋭い目をしていた。

「ウーネさん。正直に話してください。この世界に来て、わたしは黒髪黒目は見かけませんでした。そして王城に行かなければ異世界人に居場所はない。帰れる事も知らない。その居場所から逃げられ

るわけがない。体(てい)のいい奴隷になれる。……私はそう思いましたが？」

朔の言う推論に、ウーネさんはキッと朔を睨んだ。それでも朔は表情を崩さなかった。そしてウーネさんが「そうの通りです」と小さな声で呟いた。

「その通りですっ！！　しかし私がその事を言えば貴女方を怖がらせてしまうでしょうっ？　それを知らせずに無事に王城まで連れていければっ」

「それじゃ駄目なんだっ！！」

恐がらせたくないから言わなかったと声を張り上げたウーネさんに朔が激高してウーネさんより大きな声を出した。朔のそんな大きな声を聞いたことがなかった私達は、驚いて朔を凝視してしまった。

「もし立ち寄った町でそういう人にあったら？　甘い言葉をかけられてついていって取り返しのつかない事になったら？　人に騙されて人を信じられなくなったら？　それじゃ遅いんだ。だけど、それに警戒してくれているならまだ守れるかも知れないだろう？　……もう私は失敗したくないんだ」

朔の悲痛な表情に、声に、私達は何も言えなかった。朔の言った言葉で、私達を守ろうとしてくれている事、過去に何かあった事がわかった。――――――それを物凄く後悔している事も。

それを感じとったのか、ウーネさんは下唇をかんで「申し訳ありません」と呟いた。ウーネさんも、昔何かあったのかもしれない。

聞いただけであんな顔が出来るとは思わなかったから。

「ごめんね。怖い事言って。でも、そんな思いをさせたくなかったんだ。この気持ちを受け取ってくれるなら、危険な目にあいたくなかったら、これ受け取って」

そう言って、朔から渡されたのはお札のような短冊だった。そして、受け取った瞬間その札は銀色のチェーンの先端に、小さな紫色(ガーネット)の石が付いたペンダントになった。

「本当はブレスレットにしたかったけど、装飾をつけてると狙われそうだったから隠せるようにペンダントにしたんだ。それを首にして、服の下に隠しておいて。何かあったらそれをつかんで、助けを願って。それが、助けになるから」

悲しそうな顔の朔に言われて、私達は誰も断る事はしなかった。重たい雰囲気のまま、次の町に付いた。

馬車を降りて、その町を散策する。王都の次に発展した町らしい。私達がいた場所は王都にそこまで遠くなかったらしく、あと2日馬車に乗れば到着できるそうだ。途中で野宿するための準備をするために、この町に寄ったらしい。そして、ウーネさんに連れてこられた場所は何故か酒場。その店主のような人に声をかけると、「じゃあ、頼みます」と言って、「ここの人は信用できますから」と私達に言って、酒場から出て行った。そして、ウーネさんと話していた女性がこっちにやってきた。

「やあ、私はメハロって言うんだ。よろしくね。あんた達の事は私に任しときなっ」

アッハッハッと笑うメハロさんに、私は小さく口元を引きつらせた。

（今まで周りにいないタイプで、どうしていいかわからない……）

そんな私の様子を目ざとく見つけた朔がニヤリと笑った。見られた私は、いつもの様に朔をキッと睨んだ。朔はニヤニヤと笑っている。大きく表情を変えてないのに、小さく浮かんだ表情をコイツは見逃さなかったらしい。と、いうか絶対こっちを見ていた。

見ていた？　なんか、まるで私がこんな反応するのが分かっていたような……

眉間にしわが寄っていたのか、朔が私の眉間に指をさした。

「跡付くよ」

とグリグリしてきた。いや、痛いから、痛い痛い。放せこのやろぉぉぉぉっ！！

それを見ていたメハロさんはまたアッハッハッハと笑った。

そして、私達を奥の個室に招待した。まだ、開店時間ではないらしい。

「ウーネ嬢が帰ってくるにはまだ時間がかかるはずだから、この世界の話でもしてようか？」

とメハロさんが言った。何か知りたい事でもある？　といった後、誰かが声を上げた。

「この世界の英雄の話がしりたいっ！」

その言葉に、メハロさんは驚きで一瞬固まった。そして、悲しそうな顔をして、「どうして？」と私達に訊いた。その様子に戸惑いながらも、その質問した子は答えた。

「えっと、異世界人（わたしたち）を保護してくれるように決めたのは、その人だって聞いたから……」

そっか。とメハロさんは悲しげに笑った。この話は、誰でも知っている話さ、と前置きして言った。

「私達の英雄は、『死にたがり』なんだよ。そして、今この世界にいない」

その言葉に、私達は何にも反応できなかった。その言葉に誰かが机に足をぶつけた音だけが響いた。

理由（後書き）

誤字脱字。日本語おかしいよ～って言うのがあったら、教えてください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4530x/

死にたがりの英雄

2011年11月11日20時48分発行